*Studies in Ethiopian Languages*, 6 (2017), 21-43

**論文**

# ベニシャングル・アラビア語に関する覚書 (1)*

仲尾　周一郎
(大阪大学)
nakao@lang.osaka-u.ac.jp

## Abstract

Benishangul Arabic (abbreviated BSA) is a newly-discovered contact variety of Sudanese Arabic spoken as a hereditary second language of local Muslim populations (mainly Berta/Benishangul people) in Benishangul-Gumuz Region in western Ethiopia. Based on the author's fieldwork at Assosa in 2017, this report aims at providing a basic description of BSA. This first part of this report deals with the basic sociolinguistic situation surrounding BSA (with a focus on the hybrid nature of its substrate language, Mayu dialect of Berta/Benishangul language, Nilo-Saharan) and its phonological and nominal/adjectival morphosyntactic structures.

Phonologically, BSA is unique among Arabic varieties in that it has (i) two ejectives /k'/ and /t'/ and (ii) lexically and grammatically distinctive tones (rather than stress), but (iii) no voicing contrast. In the nominal/adjectival morphosyntax, BSA exhibits optional gender and definiteness-marking (like other contact varieties of Arabic spoken around the Horn of Africa). The author is preparing the second part of this report, which deals with its verbal morphosyntax, complex syntactic structures and folklore texts.

* 本研究は、科学研究費基盤研究 (B)「少数言語のドキュメンテーションと、エチオピア諸言語のダイナミズムに関する調査研究」（研究代表者：乾秀行、2014–2017 年度）による研究成果物である。本稿では Leipzig Glossing Rules を基に、以下の略号を用いる。1, 2, 3 : 人称、ASS：強調小辞、DAT：与格、DEF：定冠詞、DU：双数、F：女性、GEN：属格、IND：直説法、M：男性、NEG：否定、PASS：受動、PAST：過去、PL：複数、REL：関係節標識、SBJV：接続法、SG：単数。ただし、動詞活用形・前置詞に関してはそれに相当する英語の形式をグロスに充てる。また、言語名に Amh.：アムハラ語 (Amharic)、CA：古典アラビア語 (Classical Arabic)、SA：スーダン・アラビア語 (Sudanese Arabic)、BSA：ベニシャングル・アラビア語 (Benishangul Arabic)。必要に応じて音節境界をピリオド (.)、形態素境界をハイフン (-)、接語 (clitic) 境界を等号 (=)、語境界をハッシュ (#)、非文法的形式をアスタリスク (*)、不自然な形式を疑問符 (?) にて標示する。

# 1　はじめに

## 1.1　サブサハラ・アフリカにおけるアラビア語変種

1970 年代後半以後のアラビア語方言学において最も目覚ましく発展したのは、サブサハラ・アフリカにおけるアラビア語変種に関する研究であった[1]。これまでに、ナイジェリア・チャド・スーダンのアラブ人諸部族の話すアラビア語西スーダン方言 (Kaye 1976, 1982; Owens 1993a, b; Manfredi 2010)、東アフリカやチャドで話されるアラビア語ピジン・クレオール (Nhial 1975; Owens 1977; Mahmud 1979; Miller 1984; Tosco & Owens 1993; Wellens 2005; Luffin 2005, 2011; Manfredi 2017; Nakao 2017)、およびチャド・上エジプト・スーダン・紅海沿岸の非アラビア語母語話者によってリンガ・フランカとして話されるアラビア語接触変種 (Roth 1979; Rouchdy 1991; Miller & Abu-Manga 1992; Jullien de Pommerol 1997; Simeone-Senelle 2006; Manfredi 2013; Roset 2015) などに関する記述が蓄積され、これらのアラビア語変種がアフリカ諸語との接触により生成してきた実態が明らかとなりつつある。この潮流は、中東・北アフリカ世界で話される伝統的アラビア語方言を主たる研究対象としてきた、「アラブ研究」の一分野としてのアラビア語方言学の枠組みを大きく塗り替えたと言っても過言ではない[2]。

一方で、(現) エチオピアにおけるアラビア語の実態については、比較的早期から萌芽的な研究 (Ferguson 1970) が行われていたにもかかわらず、古典アラビア語の歴史的使用等を除いては、これまで体系的な研究が行われてこなかった。

本稿は、筆者が 2017 年 9 月 7–16 日の間、同州都アソサ (Assosa) で行ったフィールドワークによって発見された、アソサ附近で話されるアラビア語変種、ベニシャングル・アラビア語 (Benishangul Arabic、略号 BSA) の特徴的な言語構造を提示し、この変種がスーダン共和国で広く話されるスーダン・アラビア語 (Sudanese Arabic、略号 SA)[3] からは独立した変種であること

---

[1] 例えば、アラビア語方言学の古典と目される Fischer & Jastrow (1980) では、サブサハラ・アフリカで話されるアラビア語変種に関する情報は極めて周辺的にしか扱われておらず、そのデータの大部分は 20 世紀初頭に収集されたものに基づいていた。

[2] 広く受け入れられるには至っていないが、Versteegh (1984) が中東・北アフリカにおけるアラビア語の拡大に関して、アラブ化・アラビア語化が比較的遅く進行したサブサハラ・アフリカでのアラビア語の動態を考慮することで、新たなアラビア語史観を提示した点や、特に 2000 年代以降に中東諸国における外国人労働者によって話されるアラビア語ピジンの研究が活発になっている点 (Versteegh 2014) は、特筆に値する。

[3] スーダン・アラビア語の言語構造については、Bergman (2002)、CLIK (2008) を参照されたい。

を示す[4]。本第一部では、BSA の音韻論的諸特徴および名詞・形容詞形態論までを扱うこととし、BSA の動詞形態論や統語論・談話資料については稿を改める。

### 1.2　エチオピア・ベニシャングル＝グムズ州における多言語使用[5]

ベニシャングル＝グムズ州で伝統的に話されるアフリカ諸語としては、系統上、ナイル・サハラ大語族に属するベルタ語(Berta/Bertha/ Benishangul)[6]・グムズ語 (Gumuz)[7]・ウドゥック語 (Uduk)・コモ語 (Komo)・グワマ語 (Gwama) や、アフロ・アジア大語族オモ語派に属するシナシャ語 (Shinasha)・北マオ語 (Northern Mao) などが知られる。これらは伝統的には無文字言語であったが、国際夏期言語協会エチオピア支部 (Summer Institute of Linguistics/SIL-Ethiopia) は、2002 年以後、同州文化局・教育局と共同でベルタ語・グムズ語・シナシャ語の教育言語としての開発を行ってきた。関係者へのインタビューによると、ベルタ語による教育は、小・中学校においてその効果が実証されており、2017–2018 年には大学教育 (アソサ大学) への導入も予定されている[8]。

同州はスーダンおよび南スーダンと国境を接しており、19 世紀末にエチオピア帝国勢力下に組み込まれる以前には、フンジュ・スルターン国およびムハンマド・アリー朝エジプトの勢力下において、北部スーダン出身のアラブ

---

[4] 従来、エチオピア西部のベニシャングル＝グムズ州 (Benishangul-Gumuz Region) では、リンガ・フランカとして「スーダン・アラビア語」が話されるとされてきた (Trimingham 1952; Gori 2003; Wetter 2007)。

[5] 本稿で用いる言語データに関しては、ベルタ語は BGLDP (2014)、古典アラビア語／現代標準アラビア語は Cowan (1979)、スーダン・アラビア語は Tamis & Persson (2013) および筆者によるフィールドワーク、ジュバ・アラビア語は筆者によるフィールドワーク (Nakao 2017) に基づく。ただし、本稿では音素表記を改変し、全ての言語について長母音は母音連続 (*aa* [aː]) として、高声調 (high tone) を鋭アクセント記号 (´)、下降声調 (falling tone) を曲アクセント記号 (^) にて表記し、子音については IPA と異なる表記を次の音素に対して用いる: ʼ [ʔ]、*t̲* [θ]、*j* [ʤ] (CA) または [ɟ] (ベルタ語・SA・JA)、*ḥ* [ħ]、*k̲* [x]、*d̲* [ð]、*š* [ʃ]、*ṣ* [ˤ]、*ḍ* [dˤ]、*ṭ* [tˤ]、*ẓ* [ðˤ] (CA) または [zˤ] (SA)、ʻ [ʕ]、*ġ* [ɣ]、*y* [j]。ただし、BSA (およびベルタ語) は阻害音に有声性の対立がないため、その音素表記は有声性に関して必ずしも IPA とは一致しない。なお、アムハラ語については *Encyclopaedia Aethiopica* に則った転写を用いる。

[6] 現在、ベルタ語話者 (= ベルタ人) は、本来「ベルタ (Berta/Bertha)」は「奴隷化された人々」(非ベルタ人を起源とする人々を含む) を示す名称であることを理由として、言語名・民族名として「ベニシャングル (Benishangul/Beni Shangul)」を選好している。なお、後者の名称はアラビア語形態素 *banii*「～の子孫」とベルタ人の伝統的儀礼である *šangur* に由来する。ただし、本稿では「ベルタ」という名称が広く人文学諸領域において使用されてきたことに鑑み、この名称を便宜的に用いる。

[7] 近年では、これまで「グムズ語」として知られてきた言語の方言的多様性や同系の新言語 (ダーツィーン語 Daats'íin) が発見された結果、単一の言語ではなく言語群あるいは語族 (グムズ諸語 Gumuzoid) とすることが提唱されている (Ahland 2016)。

[8] ベルタ語マユ方言話者かつベルタ語教育の専門家であり、筆者の主インフォーマントである Abdulnasir Ali 氏 (1985 年生) とのインタビューに基づく。本稿におけるベルタ人・ベルタ語・BSA に関する記述は、特に示さない限り同氏とのインタビューに基づく。

人 (アラブ化したヌビア人を含む) 奴隷商人等を首長とする諸首長国 (chiefdom) による統治が行われていた。この結果、先述のナイル・サハラ系の諸民族は漸次的にイスラーム化し、アラビア語を文字言語・共通語として用いてきた[9]。現在ではアソサなど都市部ではアムハラ語も広く用いられるが、農村部ではアムハラ語の知識を持たず、共通語としてはアラビア語のみを用いる話者も多い。

これらのアラビア語話者は、アラビア語を「第二言語」(“second language”) として位置づけているが、実際には彼らが「第一言語」と位置付けるエスニック言語と同時に習得されており、ある種の母語であるといえる。中でもベルタ語話者は大多数がムスリムであり、特に、歴史的にはスーダン出身のアラブ人奴隷商人との混血により形成された「マユ」(Mayu)[10] と呼ばれるベルタ語話者集団は、日常的にアラビア語を使用しており、彼らの話すベルタ語変種 (マユ方言) もアラビア語の影響を強く受けている。例えば、(1) のマユ方言の会話例のうち、太字で示した形態素はベルタ語固有のものであるが、その他は全てアラビア語からの借用である。

(1) A: *billái* *gárra=**gé*** *alwárgá=**lé*** ***ṯa**=(a)rráha*
please read=**1SG.DAT** letter=**this** **at**=rest

*inšan* *walá* ***aa**-gádar-**í*** ***áá**-garra* *al’árabi.*
because NEG **1SG**-can-**IND** **1SG.SBJV**-read Arabic

「私はアラビア語が読めないもので、どうかこの手紙を私にゆっくり読んでくれませんか。」

B: *haláas,* *yaani* *ibrahím* *wással-**í*** *mín=**ṯa**=addis-ábaba*
okay it.means Ibrahim arrive-**IND** from=**at**=Addis-Ababa

*assabá,* *wálla* *ba’ad* *yoom-éen* *addúk’uš.*
tomorrow or after day-DU morning

「よろしい、ええと、イブラヒームが明日か二日後の朝にアジスアベバから到着する、とのことだ。」

---

[9] 1990 年代までは、ベルタ人教師はスーダンに越境してアラビア語教育の教員免許を獲得し、本国の公共の小・中学校においてアラビア語教育を行っていた。このため、現代標準アラビア語の運用能力をもつ人々も一定数存在する (Abdulnasir Ali 氏を含む)。

[10] Abdulnasir Ali 氏によると、「マユ」は「カテゴリー」であり、氏族や家系などの集団を指さすものではない。マユはエスニシティとしてはベルタ人であり、イスラームの信仰や父系アラブ系譜、アラビア語の使用をアイデンティティの一部としているにもかかわらず、決して「アラブ人」としてのアイデンティティを持たないことは特筆に値する。マユ方言はアソサを中心に広く話されており、ベルタ語の標準化はマユ方言をもとに行われている。

こうした語彙借用に付随して、翻訳借用や節構造自体の借用も見られる。以下の例では、統語的には BSA とマユ方言 (M.) はほぼ逐語的に置換可能である。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (2) | M. | *ali* | *t'awwalá-'i* | *walá* | *šap'uṯ-o* | *ngo* | *attelefón.* |
| | | 1SG | stay.long-IND | NEG | hit-PAST | 2SG | telephone |
| | BSA. | *ána* | *t'awwál-da* | *máa* | *darab-da* | *lée=g* | *ad=delefóon.* |
| | | 1SG | stayed.long-1SG | NEG | hit-1SG | DAT=2SG | DEF=telephone |

「私はあなたに長いこと電話をしなかった。」

こうした地理的・歴史的背景を受け、同地域で話されるアラビア語は、南北スーダンで話されるアラビア語諸変種、すなわちスーダンで話されるスーダン・アラビア語 (SA) や、南スーダンで話されるアラビア語クレオールであるジュバ・アラビア語 (Juba Arabic、略号 JA) と一つの変種群をなす。例えば、(2) に示すように、語彙的には、SA や JA と以下のような同源語が共有されている。本稿では、便宜上、主としてベニシャングル＝グムズ州のベルタ語話者によって話されるこのアラビア語変種を、「ベニシャングル・アラビア語 (Benishangul Arabic、略号 BSA)」と呼ぶ。

表 1：CA-SA-BSA-JA 基礎語彙対照表

| CA | SA | BSA | JA | |
|---|---|---|---|---|
| *ṭifl* | *jana* | *jána* | *jéna* | 「子供」 |
| *fam* | *ḵašum* | *hášum* | *kásuma* | 「口」 |
| *'uḏn* | *aḍaan* | *at'áan* | *adána* | 「耳」 |
| *rijl* | *kuraa'* | *gurá(a')* | *kurâ* | 「足・脚」 |
| *qiṭṭ* | *kadiis* | *gadíiz* | *kedîs* | 「猫」 |
| *ma'za* | *ġanamaaya* | *k'anamááya* | *ganamáya* | 「(一頭の) 山羊」 |
| *jalasa* | *gannab* | *gánnab* | *géni* | 「(彼は) 座った」 |
| *bakaa* | *koorak* | *góórag* | *kóre* | 「(彼は) 泣いた」 |
| *maa(ḏaa)* | *šinú* | *šunú* | *sunú* | 「何」 |
| *mataa* | *miteen* | *midéen* | *mitên* | 「いつ」 |

BSA 話者は、スーダン＝エチオピア国境策定後も頻繁に越境的な往来を行ってきたため、エチオピア領内ながら BSA においては通貨や行政に関わる語彙についても、同国の「作業語」(working language) であるアムハラ語ではなく、現代スーダンにおいておおよそそれに対応する語彙が用いられる。例え

ば、「ブル (Amh. *bərr*)」はほぼ同等の価値をもっていたスーダンの旧通貨名から *riyáal*「1 リアル」、「10 ブル (Amh. *assər bərr*)」はほぼ同額のスーダンの現通貨名から jinée「1 ポンド」と呼ばれる。また、「郡 (district, Amh. wäräda)」や「州 (region, Amh. kələl)」についても、ほぼ同規模のスーダンの行政単位名から mahallííya「郡」や wiláaya「州」が用いられる。この他、アソサの基本的な交通手段である三輪タクシー (Amh. bağağ) に対しても BSA ではスーダンと同じ名称 rákša (SA. rakša) が、主食インジェラ (Amh. ənğära) に対しても、BSA では類似するスーダンの主食の名称 gurááza (SA. guraasa) が用いられる[11]。

一方で、部分的にはアムハラ語からの影響と考えられる語彙特徴も存在する[12]。wárada (Amh. wäräda)「郡」や mazgarám (Amh. mäskäräm)「マスカラム月」などの借用のほか、翻訳借用も見られる。例えば、(3) に示すように BSA においては záá'a は「時 (hour, o'clock)、時計 (clock, watch)」を表すとともに、アムハラ語における同源語 *sä'at* と同様に「正午 (noon)」をも示す。また、時間表現には標準時間と 6 時間のずれをもつ、いわゆる「エチオピア時間」が用いられる[13]。

| (3) | SA | BSA | Amh. | |
|---|---|---|---|---|
| | *saa'a* | *záá'a* | *sä'at* | 「時、時計」 |
| | *aḍ=ḍuhur* | *az=záá'a* | *sä'at* | 「正午」 |
| | *saa'a tis'a* | *zaa'a-daláada* | *sost sä'at* | 「9 時」 |
| | (hour nine) | (hour-three) | (three hour) | (gloss) |

このほか、一般的には SA や JA では使用されない、BSA に特徴的な語彙として、*zúuf*「髪」、*déeš*「大勢」、*hóol*「年」、*dóor*「週」、*dúk'uš*「(早)朝」、*dárid*「収穫期」、*zabáa(h)*「明日」などの名詞、*be=l=báal*「ゆっくり」、*be=d=díig*「急ぎで」、*be=l=murúúwa*「力ずくで」などの副詞が見られる[14]。

ベルタ語話者による BSA との二言語併用の結果、基本的にはベルタ語におけるアラビア語借用語は BSA と同じ形式を持つ。しかし、稀にベルタ語

---

[11] なお、ベルタ人はいわゆるスーダン料理を常食するなど、物質文化的にもスーダン文化が継承されている。

[12] 同義語のペアである BSA. *nóo', áyna* (SA. *noo', 'ayna*)「種類」および BSA. *fággar, házzab* (SA. *fakkar, ḥassab*)「彼は考えた」について、SA では *noo'* および *fakkar* が多用されるのに対し、BSA では *áyna* および *házzab* が多用される。これは、対応するアムハラ語 *'aynät*「種類」、*assäbä*「彼は考えた」との音形の類似によるものだと考えられる。

[13] ただし、BSA でも *dúhur*「正午」や *zaa'a-díz'a* (gloss: hour-nine)「9 時」も併用される。

[14] ウガンダ・ケニアで話される JA の姉妹語であるアラビア語クレオール、ヌビ語 (Nubi) にも同源語 *sabâ*「明日」や *sû*「毛・髪」が見られる。これらは BSA とヌビ語の系統的な近さを示すというよりも、周圏論的に古形式の残存であると解釈することが妥当であろう。

*aṯimbâk'* vs. BSA. *dumbáag*「タバコ」やベルタ語 *ašáṯa* vs. BSA. *šát't'a*「唐辛子」のように必ずしも一致しない場合がある。また、ベルタ語 (固有語) では分節音の長短は弁別的でないため、正書法上は長母音・重子音が表記されないが、BSA では長短は弁別的であるため、(4) に示されるように音韻論的解釈上差異が生じる場合もある (ただし、現実的には、ベルタ語においても長母音・重子音の現れには揺れが見られる)。なお、ベルタ語におけるアラビア語借用語では (4) に示されているように、アラビア語定冠詞 *al=* や接尾人称代名詞が化石化している場合があるが、BSA ではそれらは独自の形態素としての性質をもつ[15]。その他、ベルタ語系の形態素等が付加される場合もある。

| (4) | ベルタ語 | BSA |
|---|---|---|
| | *amí*「叔父」 | *amm=í*「私の叔父」(uncle=1SG) |
| | *adâr*「村」 | *ad=dáar*「その村」(DEF=village) |
| | *ma'ûn*「助力」 | *maa'úun*「助力」 |
| | *kámmu*「幾ら」 | *gám*「幾ら」 |
| | *walá* 否定辞 | *wala*「(～も) ～ない」 |
| | *badaliŋ*「～の代わりに」 | *badal*「～の代わりに」 |
| | *góraga*「叫ぶ」 | *góórag*「彼は叫んだ」 |

現時点では、ベニシャングル＝グムズ州においてベルタ語話者以外の話すアラビア語変種や、隣接するスーダン・青ナイル州で話されるアラビア語変種については十分な情報が得られておらず、今後の調査が俟たれる。しかし、BSA 話者によると、BSA (と同様のアラビア語変種) はエチオピア・スーダン国境の両側において、ベニシャングル＝グムズ州北部のグバ (Guba) のグムズ語話者や同州南部のコモ語話者、そしてベルタ語話者の大部分によって話されると捉えられている。この情報に基づくならば、BSA は図 1 左図に示す地域を中心に、およそ 20 万人前後の話者を持つ可能性が指摘できる。ただし、本稿では詳述しないが、筆者が行ったスーダン共和国・青ナイル州最南部出身のウドゥック語ヤブス方言話者の話すアラビア語変種 (本研究では便宜的にヤブス・アラビア語 Yabus Arabic と呼ぶ) に関しては、ジュバ・アラ

[15] アラビア語からの借用名詞は基本的に化石化した定冠詞をもつが、その文法的機能は完全に失われている。例：ベルタ語 *alhôl*「年」vs. BSA. *hóol*「年」、*al=hóol*「その年」。

ビア語と BSA の中間的な特徴もつピジン化されたアラビア語変種であることが確認できている[16]。

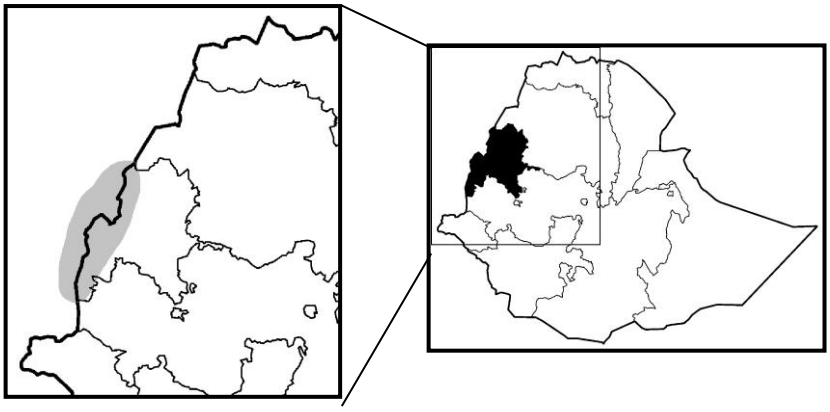

図 1：ベニシャングル＝グムズ州 (右図、黒色) および
ベニシャングル・アラビア語が話されると考えられる地域 (左図・灰色)

## 2　ベニシャングル・アラビア語の音韻構造

### 2.1　母音体系

BSA には、表 2 の母音音素が見られる (母音の音色は IPA と必ずしも一致していない)。本稿では長母音は母音連続として表記するが、(5) に示すように、長母音 (/ee/ および /oo/ を含む) は定冠詞 *l=* の直前では義務的に短母音として実現し、(6) に示すように語末では母音の長短が弁別的でないため、これらの環境では短母音として表記する。このため、本稿では表記上は短母音 /e/ および /o/ を用いるが、とりあえずこれらは音韻論的には異音として扱う[17]。

表 2：母音目録

| | | |
|---|---|---|
| i / ii | | u / uu |
| | (e) / ee　　(o) / oo | |
| | a / aa | |

[16] ウドゥック語ヤブス方言話者の Siman Osa 氏 (1987 年生) との調査による。動詞活用や接尾人称代名詞の使用に関して顕著な簡略化・異分析が見られる。ただし、ジュバ・アラビア語よりも安定性が低く、いわゆる初期ピジン (incipient pidgin) の段階であると考えられる。

[17] 現時点では十分なデータが得られていないが、BSA では少なくとも句レベルでは /e/ と /ee/ のある種の最小対も見られるようである。例：***been****=náaz* (between=people) [bè:nnâ:s]「人々の間」vs. ***be=n****=náaz* (with=DEF=people) [bènnâ:s]「人々と共に」。

(5) ***fi***=*z=zéef*「夏に」(***fii***=「に」、*(a)z=zéef*「夏」)
***be***=*r=rááha*「ゆっくりと」(***bee***=「と共に」、*(a)r=rááha*「安息」)
***jô*** *n=náaz*「人々が来た」(***jóó***「来た.3PL」、*(a)n=náaz*「人々」)

(6) *gadabd**úú*** [kàdàbtú:] ~ *gadabd**ú*** [kàdàbtú]「君達はそれを書いた」
*darab**óó*** [tàràbó:] ~ *darab**ó*** [tàràbó]「彼は殴られた」
*bamb**éé*** [bàmbé:] ~ *bamb**é*** [bàmbé]「甘藷」

長母音の /ee/ および /oo/ は、(7) に示す通り、それぞれ二重母音 [ei] および [ou]として音声実現しうる。

(7) *wéen* [wê:n] ~ [wéìn]「どこ」
*jéeš* [ɟê:ʃ] ~ [ɟéìʃ]「軍」
*zóot'* [sô:t'] ~ [sóùt']「声、鞭」

短母音 /a/ は (8) に示すように [ɜ] (語頭開音節など)、[ɛ] (音節末子音 /y/ や前舌母音の前など)、[ɔ] (音節末子音 /w/ の前など) のような異音として実現する場合があるが、本稿ではこれらの母音は音素として認めない。

(8) *gálib* [kɜ́lìb] 「犬；心臓」
*gadé* [kɜ̀dé] 「どうか、何卒、いざ」
*zayyid* [sɛ́ijìt] 「紳士、ミスター」
*janíin* [ɟɛ̀nî:n] 「子供たち」
*jáw* [ɟɔ́w] 「天気」
*gašgóoš* [kɔʃkô:ʃ]「マラカス」

高母音 /i/・/u/ は、それが高声調をもたない語末閉音節の核母音である場合、母音はじまりの接尾辞・前接語が後続する場合、(9) に示す通り削除される[18]。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| (9) | *gáá'id* | 「居る (SG.M)」 | *gaa'd-íin* | 「居る (PL.M)」 |
| | *zámih* | 「よい (SG.M)」 | *zámh-a* | 「よい (SG.F)」 |
| | *zúdur* | 「胸」 | *zúdr=u* | 「彼の (=*u*) 胸」 |
| | *barnáámij* | 「予定」 | *barnáámj=ak* | 「貴方 (=*ak*) の予定」 |
| | *wílid* | 「(彼は) 生んだ」 | *wild-ó(óh)* | 「(彼は) 生まれた」 |

[18] 接尾人称代名詞 =*a*「彼女の」は、直前の母音にピッチアクセント (後述) を付与するため、この母音削除は生じない。例 : *ráájil*「男、夫」、*raajíl=a* (**ráájl=a*)「彼女の夫」。また、=*(a)na*「我々の」の付加に際しては母音削除が随意となる (*jízim*「体」*jízím=na* ~ *jízm=ana*「我々の体」)。

## 2.2　子音体系

BSA には、表 3 に示す子音音素が見られる。ただし、音素 /ŋ/ および /ṯ/ の分布は *náŋnaŋ*「彼はぶつぶつ言った」や *ṯí'ib*「オオカミ」などごく僅かの語彙に限られている。先述のように、BSA はベルタ語の影響を強く受けており、特に子音体系に関しては、言語接触に起因する音韻変化が顕著に見られる[19]。この結果、多くのアラビア語方言がもつ咽頭化／軟口蓋化子音や咽頭摩擦音、有声性対立をもたず、および放出音 /t'/ および /k'/ を持つ点で際立った特徴をもつ[20]。さらに、軟口蓋／口蓋垂摩擦音は、/h/ の自由異音として [x] が観察されるのみであり、音素としては存在しない (例 : BSA. *háal* [hâːl] ~ [xâːl]「状況；おじ」、cf. SA. *ḥaal*「状態」、*ḵaal*「おじ」)。

表 3：子音目録

| | 唇音 | 歯音 | 歯茎音 | 硬口蓋音 | 軟口蓋音 | 声門音 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 破裂音 | b [b (~ p)] | | d [d ~ t] | j [ɟ (~ c)] | g [g ~ k] | ' [ʔ ~ Ø] |
| 放出音 | | | t' [t'] | | k' [k'] | |
| 摩擦音 | f [f (~ v)] | (ṯ [θ (~ ð)]) | z [s (~ z)] | š [ʃ (~ ʒ)] | | h [h ~ x] |
| 鼻音 | m [m] | | n [n] | | (ŋ [ŋ]) | |
| ふるえ音 | | | r [r] | | | |
| 側面音 | | | l [l] | | | |
| 接近音 | w [w] | | | y [j] | | |

以下では、各音素の諸特徴について詳述する。

第一に、破裂音および破擦音 (特に /d/、/z/、/g/) は有声性による対立を持たない。筆者による聴覚印象としては、/d/ と /g/ は共鳴音間では有声音として (例 : *yaa**d**ú* [jàːdú]「どれ」、*ín**d**a* [índà]「あなた」)、形態素境界や語中子音連続では無声音として実現しやすく (例 : ***gadd**áab* [kàttâːb] 「嘘つき」、*b=á-**gd**ar* [báktàr]「私はできる」、*árd* [árt]「地」)、その他の破裂音 (/b/ およ

[19] ベルタ語マユ方言の音韻論に関しては Neudorf (2016) を参照されたい。

[20] ただし、咽頭化子音や咽頭摩擦音は、周縁的なアラビア語変種では失われやすい (Versteegh 2014)。キプロス・ギリシャ語の影響を受けたキプロス・マロン派アラビア語 (Cypriot Maronite Arabic) では有声性対立が破裂音には基本的に存在しないが、摩擦音には存在する (Borg 2006)。喉頭化子音 (放出音・入破音・声門化音) をもつアラビア語変種としては、イエメン・ザビード方言 (Prochazka 1987) や、北シナイや上エジプト、ハルガ・オアシスなどで話される一部のエジプト方言 (de Jong 2000; Fischer & Jastrow 1980)、一部のチャド・ナイジェリア方言 (Owens 1993a, 1993b)、モロッコの定住民方言 (Heath 1997)、現代南アラビア語話者の話す第二言語としてのアラビア語変種 (Davey 2016) など僅かな例が報告されている。なお、アラビア語変種においては、放出摩擦音／喉頭化摩擦音の存在は報告されていない。

び /j/) は有声音、摩擦音は無声音として実現しやすいが、その有声性の実現は随意的であり、揺れが見られる。本稿では、現行のベルタ語正書法に鑑みて、/b, d, g, j, z/ の表記については、有声音を代表的に使用する[21]。

| (10) | SA. | BSA. | |
|---|---|---|---|
| | *tiin* | *díin* | 「イチジク」 |
| | *diin* | *díin* | 「宗教」 |
| | *saman* | *záman* | 「脂」 |
| | *zaman* | *záman* | 「時間」 |
| | *kut-ta ~ kun-ta* | *gúd-da ~ gún-da* | 「私は〜であった」(was-1SG) |
| | *gut-ta ~ gul-ta* | *gúd-da ~ gúl-da* | 「私は言った」(said-1SG) |

第二に、いくつかの環境では音素が中和する傾向がある。まず、(11) に示すように、音素 /j/ および /g/ は前舌母音 /i/ の直前において中和し、それぞれ随意的に異音として実現する。ただし、形態音韻論的操作により /i/ が脱落する場合や語幹が交替する場合は、基底の音形が保たれる。また、(12) に示すように、語末の /n/ は随意的に /ŋ/ として実現することがある。

| (11) | *dígin* | [díɟìn] ~ [dígìn] | 「あごひげ」 |
|---|---|---|---|
| | *zíjin* | [síɟìn] ~ [sígìn] | 「刑務所」 |
| | *dígn=u* | [dígnù], *[díɟnù] | 「彼のあごひげ」 |
| | *zíjn=u* | [síɟnù], *[sígnù] | 「彼の刑務所」 |
| | *jízim* | [ɟísìm] ~ [gísìm] | 「体 (SG)」 |
| | *gízim* | [ɟísìm] ~ [gísìm] | 「部分 (SG)」 |
| | *ajzáam* | [àɟsâːm], *[àksâːm] | 「体 (PL)」 |
| | *agzáam* | [àksâːm], *[àɟsâːm] | 「部分 (PL)」 |

(12) *(a)šaan ~ (a)šaaŋ*「なので、ために (理由・目的節)」
*gárin ~ gáriŋ*「角」
*gút'un ~ gút'uŋ*「綿」

[21] ただし、現行のベルタ語正書法では借用音素として /t/、/s/、/k/ が採用されている。これは恐らく古典アラビア語／現代標準アラビア語 (やスーダン・アラビア語) に関してベルタ語話者が一定の知識をもつためであり、語源的表記と考えられる。実質的にはベルタ語におけるこれらの音素の実現は不安定であり、BSA の記述に基づくベルタ語正書法の見直しが俟たれる。

第三に、例 (13) に示すように、BSA は SA など多くのアラビア語変種がもつ咽頭化／軟口蓋化子音 (いわゆる「強調音」) や咽頭音・口蓋垂音をもたないが、2 つの放出音 /t’/ (SA. /ṭ/ [tˤ ~ tʶ] に対応[22]) および /k’/ (SA. /ġ/ [ʁ ~ ɣ] および /q/ [q] に対応) がそれらの一部と音対応を示す[23]。

| (13) | BSA. | SA. |
|---|---|---|
| | *t’íin*「泥・泥濘」 | *ṭiin*「泥・泥濘」 |
| | *zóot’*「声、鞭」 | *ṣooṭ*「声」、*sooṭ*「鞭」 |
| | *it’náášar*「十二」 | *iṭnaašar*「十二」 |
| | *dáábit’*「オフィサー」 | *ḍaabiṭ*「オフィサー」 |
| | *k’álat’*「間違い」 | *ġalaṭ*「間違い」 |
| | *k’ááli*「高価な」 | *ġaali*「高価な」 |
| | *šúk’ul*「仕事・もの」 | *šuġul*「仕事・もの」 |
| | *zak’áyyir*「小さい」 | *ṣaġayyir*「小さい」 |
| | *al=k’ur’áan*「コーラン」 | *al=qur’aan*「コーラン」(CA からの借用) |
| | *ik’líim*「州 (region)」 | *iqliim*「地方・地域 (region)」(CA からの借用) |
| | *zúúra*「章、写真・絵」 | *suura*「章」、*ṣuura*「写真・絵」 |
| | *zurúuf*「環境・境遇」 | *ẓuruuf*「環境・境遇」 |
| | *dúhur*「正午」 | *ḍuhur*「正午」 |
| | *haláaz*「おしまい、よし」 | *ḵalaaṣ*「おしまい、よし」 |
| | *hadáar*「野菜」 | *ḵaḍaar*「野菜」 |

下表 4 は SA と BSA の音対応をベルタ語との音素論的比較において示す。本稿では詳述する余裕はないが、SA の有標阻害音に対する BSA での放出音や無標阻害音での対応は、単純にベルタ語との言語接触に起因する音声特徴の転移としては説明できない。例えば、SA - BSA - Berta の対応 /ṭ/ - /t’/ - /t’/ からは /ṣ/ - /s’/ - /s’/ や /ḍ/ - /ɗ/ - /ɗ/ が期待されるが、実際には BSA は /s’/ や /ɗ/ を持たず、/ṣ/ - /s/ - /s’/、/ḍ/ - /d/ - /ɗ/ という対応を示している[24]。

---

[22] 例外的に SA. /ḍ/ が BSA. /t’/ で対応する例も 3 語のみながら見られる。例：*at’áan*「耳」(SA. *aḍaan*)、*ádum ~ át’um*「骨」(SA. *aḍum*)、*banaat’úur*「トマト」(SA. *banaḍoora*)。

[23] なお、BSA 話者が現代標準アラビア語 (CA) を話す場合には、/ṣ/、/ẓ/、/ḍ/ は軟口蓋化子音として弁別的に実現される (例：*ẓurúuf*「状況」、*ḍáabit’*「オフィサー」)。CA の音素 /q/ は SA・BSA では通常 /g/ が対応するが、BSA 話者が CA を話す際には /k’/ が用いられる (例：CA. *qalb*、BSA. *gálib*、BSA 話者による CA. *k’álib*「心」)。その他の CA の音素 (/ṭ/、/ġ/、/ḵ/、/ḥ/、/ʿ/) は、それぞれ BSA での対応と同様に [t’]、[k’]、[h]、[h]、[ʔ] と実現される。

[24] ベルタ語におけるアラビア語借用語も、BSA と全く同じ対応を示す。興味深いことに、エチオピア・セム諸語におけるアラビア語借用語では BSA とほぼ完全に同じ対応が見られ

表 4：SA-BSA-Berta 音素体系の対照

<table>
<tr><td rowspan="2">SA</td><td>t</td><td>ṭ</td><td>s</td><td>ṣ</td><td>k</td><td rowspan="2">(q)</td><td>k̲</td><td>ḥ</td><td>h</td><td>’</td></tr>
<tr><td>d</td><td>ḍ</td><td>z</td><td>ẓ</td><td>g</td><td>ġ</td><td>‘</td><td>—</td><td>—</td></tr>
<tr><td rowspan="2">BSA</td><td rowspan="2">d</td><td>t’</td><td rowspan="2">z</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">g</td><td rowspan="2">k’</td><td colspan="3">h</td><td rowspan="2">’</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">Berta</td><td>—</td><td>t’</td><td>—</td><td>s’</td><td>—</td><td>k’</td><td>—</td><td>—</td><td>h</td><td>’</td></tr>
<tr><td>d</td><td>ɗ</td><td>z</td><td>—</td><td>g</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td></tr>
</table>

### 2.3　超分節音体系と音節化

BSA の1形態素は最大で1音節のみが高ピッチをもち、以下ではこれを「ピッチ・アクセント」(略号 H*) と呼ぶ。本稿では、ベルタ語正書法を基に、その音節が平板調である場合には高声調 (V́または V́V́にて標示)、下降調の場合は下降声調 (V̂または V́V にて標示) として記述する。無標の音節は相対的に低いピッチで実現し、音韻的にも無標低声調 (default L) と考えられる。

H* の位置は、原則としては形態素末から三モーラ目前後の母音として予測可能であるが、形態論的操作や声調発生 (tonogenesis) の結果として、その原則に当てはまらない例も見られる。例えば、(14) に見られるように、接尾人称代名詞の付加によって、語幹の H* の位置は変化する。また、語末声門音の削除と語末での母音の長短の中和、および類推や基層言語からの借用により、(15) に見られるような最小対が発生している[25]。

(14)　*gálam*「ペン」　　*jálad*「彼は鞭打った」
　　*gálam=u*「彼のペン」　　*jálad=u*「彼は彼を鞭打った」
　　*galám=a*「彼女のペン」　　*jalád=a*「彼は彼女を鞭打った」
　　*galam=í*「私のペン」　　*jalad=ní*「彼は私を鞭打った」

(15)　*gadáb-du*「君達は書いた」(wrote-2PL)
　　*gadab-dú(ú)=Ø*「君達はそれを書いた」(wrote-2PL=3SG.M)

　　*yáá-kul-u*「彼らは食べる」(3PL-eat-3PL)
　　*yaa-kul-ú(ú)*「それは食べられる」(3SG-eat-PASS)

---

る (Leslau 1990)。なお、ヤブス・アラビア語も /k’/ と /t’/ を持つが、この変種は有声性対立をもつ (例：*tíin*「イチジク」、*díin*「宗教」、*t’íin*「粘土、泥濘」)。

[25] 対応する CA の形式、*ṯaˈlaaṯa*「三」vs. *ṯalaaˈṯaa’*「火曜」、*kaˈtab-tum*「君達は書いた」*katab-tuˈmuu=h(u)*「君達はそれを書いた」と比較されたい。BSA. *ahád*「日曜」は「火曜」からの類推で語末音節が高声調をもつに至ったと考えられる。

*yoom-ad=dalááda*「三日目、三日 (みっか)」(day-[DEF=three])
*yoom-ad=dalaadá*「火曜日」(day-[DEF=Tues(day)])

*yoom-al=’áhad*「約束の日」(day-[DEF=promise])
*yoom-al=’ahád*「日曜日」(day-[DEF=Sun(day)])

*šáášа*「スクリーン」(SA/CA. *šaaša*「スクリーン」)
*šaašá*「ケール」(< Berta. *šaašá*「ケール」)

また、同様の声調発生の結果、H* の位置のみならず、語末音節においてはそのメロディの対立が発生しているようである。以下に示す通り、語末音節の H* の音声実現には、高声調 (16a, d) と下降声調 (16b, c) の二種が見られる[26]。ただし、メロディの対立の弁別性は低く、明らかな最小対も見られない。

(16) a. CV́CC# [CV́C][27]
*náyy*「生の」、*jáww*「天気」、*dámm*「血」、*bídd*「娘」、*hágg*「権利」、*maháll*「場所」、*muhímm*「大切な」
b. CV́VC# [CV̂:C] (~ CV̂C [CV̂C])
*ráaz*「頭」、*fíil*「象」、*gáan* ~ *gân* 「～であった」、*gidáab*「本」、*gabíir*「大きい」
c. CV́V# [CV̂:] (~ CV́Vh# / CV́V’(V)#)[28]
*máa*「～ない」(NEG)、*jinée(h)*「10 ブル・1 ポンド」、*zabáa(h)*「朝」、*kuráa(’)*「足」、*bidáa(’)*「例のもの」、*záa* ~ *záá’a*「時計、正午」
d. CV́# [CV́] (~ CV́V́# [CV́:])[29]
*dá*「これ (M)」、*munú*「誰」、*(w)aráh*「行こう」、*ší(í)*「もの」、*fí(í)*「ある」、*já(á)*「彼は来た (3SG.M)」、*gadabó(ó)*「(それは) 書かれた」

以上のように、基本的には下降調は長母音を持つ語末音節でのみ観察される。ただし、高声調をもつ語末開音節が定冠詞・関係詞 *al=* に先行する場合、

---

[26] この他、CV́V́C# (~ CV́C) が接尾人称代名詞 *=y*「私の」に関して見られる。例：*abúú=y* ~ *abú=y*「私の父」、*baráá=y* ~ *bará=y*「私だけ」。
[27] 単独では *dámm* [tám] や *maháll* [màhál] のように単子音として実現するが、前接語や接尾辞を付加すると再音節化が生じ、*dámm=ag* [támmàk]「君の血」(blood=2SG.M) や *mahall-áad* [màhàllâ:t]「場所 (PL)」のように基底の重子音が実現する。
[28] ここで示されるような語末の /’/ および /h/ は表層的には直後に母音で始まる接尾辞・前接語が付加される場合にのみ実現する。例：*bidáá’=u*「彼のもの」、*zabaah-al=héer*「おはよう」。なお、語頭の /’/ も直前に接頭辞・後接語が付加される場合にのみ実現する。例：*uzdáaz*「先生」vs. *al=’uzdáaz*「その先生」。
[29] これら語末の高声調も声調発生の結果生じたものである。対応する CA 文末形 *šay’*「もの」、*fíi=h*「その中に」、*jaa’-Ø*「彼は来た」、*katab-uu=h*「彼らはそれを書いた」と比較されたい。

再音節化が生じ、表層的には下降声調が短母音をもつ音節に実現する。この場合、H* は高声調として実現することはない。

(17) *minú(ú) al=gáwi?* (L.H # L.H.L)「強いのは誰だ？」(who DEF/REL=strong)
→ [mì.nûl.gá.wì] (L.HL.H.L), *[mì.núl.gá.wì] (L.H.H.L)

*j-ó(ó) an=náaz.* (H # L.HL)「人々が来た。」(came-3PL DEF=people)
→ [ɟôn.nâːs] (HL.HL), *[ɟón.nâːs] (H.HL)

BSA にはまた、H* をもたない形態素も観察される。それらは接続詞・前置詞などの機能語であるか、名詞・動詞の複合に際して主要部に生じるアクセント脱落 (deaccenting) によるものであり、基本的に全て拘束形態素である。例えば、名詞複合においては、(18) に示すように主要部が先行するが、その H* が脱落する。このように、H* はある種のイントネーション句 (intonational phrase) を形成する機能をもっていると考えられる[30]。

(18) ***k'ázab***「茎」+ *zúggar*「砂糖」→ ***k'azab**-zúggar*「サトウキビ」
***jábal***「山」+ *gúle* (地名) → ***jabal**-gúle*「グレ山」

しかし、(19) に示すように低声調と高声調／下降声調のメロディの対立が見られる点は特筆に値する。名詞複合については、第 3 節にて後述する。

| | | | |
|---|---|---|---|
| (19) | L | ***hagg** dá* | 「これの」(of this.M) |
| | H | ***hágg** dá* | 「この権利」(right this.M) |
| | L | ***lee** ibrahíim* | 「イブラヒームへ」(for Ibrahim) |
| | H | ***léé** ibrahíim* | 「何故イブラヒームなのか」(why Ibrahim) |
| | L | *ga**dab**-du léé=u.* | 「君達は彼に書いた」(wrote-2PL for=3SG.M) |
| | H | *ga**dáb**-d=u léé=u.* | 「君達は彼にそれを書いた」(wrote-2PL=3SG.M for=3SG.M) |
| | L | *bi**daa** dá* | 「これの」(of this.M) |
| | HL | *bi**dáa** dá* | 「この例のもの」(thingummy this.M) |
| | L | ***zaa('a)**-wááhid* | 「7 時 (1.2 節参照)」(hour-one) |
| | HL | ***záá('a)** wááhid* | 「1 時間」(hour one) |
| | L | *dá **maa** guwáyyiz.* | 「これは良いではないか」(this.M ASS good) |

[30] 南スーダンのジュバ・アラビア語にも同様のアクセント脱落が見られる。例 : *gásab*「茎」vs. *gasab-súkar*「サトウキビ」、*jébel*「山」vs. *jebel-kujûr*「クジュル山」。

HL　*dá* ***máa*** *guwáyyiz.*　「これは良くない」(this.M NEG good)

L　***gaan*** *bi=’á-’arf=u*　「私はそれを知っていた」
(PAST IND=1SG-know=3SG.M)

HL　***gáan*** *bi=’á-’arf=u*　「私がそれを知っていれば」
(if IND=1SG-know=3SG.M)

その他、H* をもたない自由形態素は基本的に談話標識類 (例：*yaani* ~ *ya’ani*「つまり」、*fa*「それで」) に限られる。ただし、基層言語から BSA に一時借用される場合には、(20) に示す通りこの限りではない (*awaza* および *šangur* はベルタ語からの借用)。(21) のように、より複雑なトーンの現れを持つ基層から借用語もその形が保持される[31]。

(20)　*awaza*　*bidaa*　*naaz-šangur.*　(L.L.L # L.L # L=L.L)
*awaza*　GEN　people-*shangur*
アワザ (管楽器名) はシャングル (儀礼名) [を行う] 人々のものである。

(21)　*gabiild=í*　*gámiilí / fá-undúlú.*
clan=(GEN.)1SG　Gamiili / Fa-Undulu (clan names)
私の氏族はガミーリ／ファ・ウンドゥルです。

## 3　名詞・形容詞形態統語論

BSA では形容詞 (分詞を含む) は名詞に類するが、名詞とは異なる形態統語論的振る舞いをもつ。BSA の名詞・形容詞を特徴づける文法範疇としては、定性 (definiteness)・性 (gender)・数 (number) があり、動詞主語人称活用や代名詞を含む統語的な一致現象を引き起こす[32]。ただし、定性および性の統語的一致に関しては種々の自由変異が見られる。

定性は主として語頭に付加される定冠詞 *al=* によって標示されるが、この形態素は (22) に示すとおり、舌頂音の前で形態素末の子音 /l/ に逆行同化が生じる。また、2.1 節および 2.2 節で示した通り、形態素初頭の母音 /a/ は

[31] ジュバ・アラビア語にも類似の現象が見られる (Nakao 2017)。

[32] また、類推により否定存在詞 *mafiiš*「ない」(F. *mafííš-a*, PL. *mafiiš-íin*) も性・数に関しては名詞・形容詞と同様の接尾辞による屈折をもつ。ただし、同義の否定存在詞 *mááfii* (< *máa* [否定辞]＋*fíi*「ある・居る [存在詞]」) はこうした屈折をもたない。本稿では詳述しないが、性および数は、代名詞類や動詞の屈折にも関わる文法範疇であるが、同様にその統語論的一致には随意性が見られる。こうした随意的な統語論的一致は、1.1 節で述べたサブサハラ・アフリカでリンガフランカとして話されるアラビア語諸変種に広く見られる。

文中において母音に後続する場合には脱落し、かつ直前の母音に韻律的な変化を生じさせる[33]。

(21) *al=bídd*「その娘」　*al=mára*「その女」
*al=gidáab*「その本」　*al=gawánja*「そのカエル」
*al=hadáar*「その野菜」　*al=’uzdáaz*「その教授、先生」

(22) *ar=ráaz*「その頭」　*an=nóóba*「その太鼓」
*az=záá’a*「その時計」　*ad=dúniya*「世界」
*aš=šát’t’a*「その唐辛子」　*at’=t’arabééza*「そのテーブル」
*aj=jéeš*「その軍」　*at̲=t̲í’ib*「そのオオカミ」

BSA においては名詞を修飾する形容詞は名詞に後続する (例：*uzdáaz guwáyyiz* (gloss: professor good)「よい先生」)。定冠詞は、(23a, c) に示す通り、定名詞を修飾する形容詞にも義務的に付加される。ただし、(23b) に示す通り、この構造においては名詞への定冠詞の付加は随意的である。

(23) a. *al=* *’uzdáaz* *al=* *guwáyyiz*
b. *’uzdáaz* *al=* *guwáyyiz*
c. **al=* *’uzdáaz* *guwáyyiz*
DEF= professor(.M.SG) DEF= good(.M.SG)
「(その) よい先生」

複合名詞に関しては、(24) および (25) に示す通り、最後部要素の直前にのみ定冠詞が付加される。

(24) a. *jidaad-* *wáádi* 「ホロホロチョウ」
b. *jidaad-* *al=* *wáádi* 「そのホロホロチョウ」
fowl- DEF= ravine

[33] なお、/j/ の前での同化は随意的である (*al=jéeš* も可)。また、関係詞 *al=* にも同形の定冠詞 *al=* と全く同じ変化が生じる。例 : *náaz aj=j-óó* (people REL=came-3PL)「来た人たち」。この他、/z/ および /t’/ の直前の動詞再帰形接頭辞 *id-* や、散発的ながら /d/ や /n/ の直前の /l/ や /n/ に随意的な逆行同化が生じる例も見られる（例：*id-zággar ~ iz-zággar*「思い出す」、*id-t’állag ~ it’-t’állag*「離婚する」、*índa ~ ídda*「君 (2SG.M)」、*gún-da ~ gúd-da*「私／君は～であった (was.1SG/2SG.M)」、*gúl-da ~ gúd-da*「私／君は言った (said-1SG/2SG.M)」、*gúl-na ~ gún-na*「我々は言った (said-1PL)」）。

(25) a. *’uzdaaz-* *(al=)’árabi*

b. **al=* *’uzdaaz-* *(al=)’árabi*

DEF= professor(.M.SG)- (DEF=)Arabic

「アラビア語の先生」

性に関しては人間名詞単数形にのみ明らかな男性・女性の対立が見られ、多くの場合は女性名詞が語尾 *-a* によって標示される。

(26) *zóol*「人 (男性)」 *zóól-a*「人 (女性)」

*t’áálib*「(男子) 学生」 *t’áálb-a*「(女子) 学生」

*gabíir*「大きい (SG.M)」 *gabíír-a*「大きい (SG.F)」

*zámih*「良い (SG.M)」 *zámh-a*「良い (SG.F)」

この語尾 *-a* は非人間名詞にも見られるが、これらの女性名詞語尾としての振る舞いは化石的である。(27) に示す通り、人間名詞 *t’áálba*「(女子) 学生」を修飾する形容詞は、一般的には女性単数形の標識 *-a* により一致することが規範的である (ただし実際には随意的) が、非人間名詞 *bágara*「牛 (牝牛)」についてはこの一致が生じることは、非文法的ではないが、稀である[34]。

(27) a. ?*t’áálb-a* *guwáyyiz*

student-F.SG good(.M)

b. *t’áálb-a* *guwáyyiz-**a***

student-F good-**F**

「よい女子学生」

c. *bágara* *gabíir*

cow big.SG(.M)

d. *bágara* *gabíír-**a*** (rare)

cow big.SG-**F**

「大きい牛」

[34] 語源的に男性名詞である *gúrzi*「椅子」についても、*gúrzi gabíir*「大きい椅子」と並行して *gúrzi gabíir-a* という形式も稀には生じうる。インフォーマント Abdulnasir Ali の言葉を借りて言うならば、「標準アラビア語のように無生物にも男性形・女性形の区別をするのはおかしな話であり、どちらでもよい」。

なお、(28b, c) に示すように、複合名詞主要部の *-a* は異形態 *-ad* と交替する (*uzdááza*「先生 (女性)」、*zúúra*「写真」、*záá'a*「時」)。ただし、(28e, f) に示すような同格的な名詞複合の場合には、この形態論的交替は見られない。

(28) a. *uzdaaz-'árabi* 「アラビア語の先生 (男性)」
(professor.M-Arabic)
b. *uzdaaz**ad**-'árabi* 「アラビア語の先生 (女性)」
(professor.F-Arabic)
c. *zuur**ad**-fáát'ma* 「ファーティマの写真」
(picture-Fatima)
d. *uzdaaz-'ibraahíim* 「イブラヒーム先生」
(professor.M-Ibrahim)
e. *uzdaaz**a**-fáát'ma* 「ファーティマ先生」
(professor.F-Fatima)
f. *zaa'**a**-daláída* 「9 時」(1.2 節参照)
(hour-three)

数に関しては、(29) に示すような少数の名詞は単数 (singular)・双数 (dual)・複数 (plural)、その他の名詞と全ての形容詞は単数・複数の別をもつ。双数形は接尾辞 *-éen* の付加 (先述の語尾 *-a* に関しては *-ad* に付加) によって形成される。これに対し、(30) に示すように、接尾辞 *-íin* や *-áad* の付加、語幹の交替、あるいは接尾辞と語幹交替の両方によって複数性が示される[35]。

(29)

| 単数 | 双数 | 複数 | |
|---|---|---|---|
| *yóom* | *yoom-éen* | *ayyáam* | 「日」 |
| *bídd* | *bidd-éen* | *banáad* | 「娘、女の子」 |
| *márra* | *marrad-éen* | *marr-áad* | 「回」 |

(30)

| 単数 | 複数 | |
|---|---|---|
| *zámih* | *zamh-íin* | 「良い」 |
| *jána* | *jan-íin* | 「子供」 |
| *fannáan* | *fannaan-íin* | 「アーティスト」 |
| *gudéeb* | *gudeeb-áad* | 「小冊子」 |
| *mánga* | *mang-áad* | 「マンゴー」 |

[35] なお、*-íin* と *-áad* は語源的にはそれぞれ男性名詞・女性名詞複数形接尾辞である。動詞派生名詞 (deverbal noun) や借用名詞と大部分の形容詞はこれらの接尾辞によって形成されるが、基本的に複数形がどの形式を持つかは予測できない。

| | | |
|---|---|---|
| *bágara* | *abgáar* | 「牛」 |
| *gabíir* | *gubáar* | 「大きい」 |
| *uzdáaz* | *azáádiza* | 「教授、先生」 |
| *arabíiya* | *arab-áad* | 「自動車」 |
| *ízim* | *uzum-áad ~ azáámi* | 「名前」 |

形容詞に関しては複数形では性は基本的に中和する。形容詞複数形は語源的には男性複数形であるが､両性の名詞複数形の修飾に用いられる｡ただし、(31b) に示すように、人間名詞については稀に女性複数形接尾辞 *-áad* (F.PL) が並行して用いられる場合がある。これに対し、(31d) に示すように非人間名詞については女性複数形接尾辞は使用できない。

(31) a. *t'aalb-áad* *guwayyiz-íin*
student-F.PL good-PL

b. *t'aalb-áad* *guwayyiz-**áad*** (rare)
student-F.PL good-**F.PL**
「よい女子学生たち」

c. *abgáar* *gudáar*
cow.PL many.PL

d. **abgáar* *gadiir-**áad***
cow.PL many-**F.PL**
「たくさんの牛たち」

また、(31) および (32) に示す通り、複数形および双数形の名詞を修飾する形容詞は義務的に複数形によって一致する。

(32) *bidd-éen* *al=guwayyiz-íin*
girl-DU DEF =good-PL
「二人のよい女の子たち」

(31) *fannaan-íin* *az=zamh-íin*
artist-PL DEF=nice-PL
**fannaan-íin* *az=zámih*
artist-PL DEF=nice(.SG.M)
「素晴らしいアーティストたち」

このほか、集合名詞から単数形 (singulative) を派生させる接尾辞 *-ááya* が存在する (例：*k'ánam*「山羊」vs. *k'anam-ááya*「一頭の山羊」)。また、人間名詞については接頭辞 *naaz-* (*náaz*「人々」からアクセント脱落を経て文法化したもの) による連合複数形 (associative plural) が見られる。例えば、*uzdáaz*「先生」に対する複数形 *azáádiza*「先生たち」は全員が「先生」である集団しか指すことができないが、*naaz-'uzdáaz*「先生たち」は少なくとも一人の「先生」を含む人間の集団を指す。

【参照文献】

Ahland, Colleen (2016) Daats'íin, a Newly Identified Undocumented Language of Western Ethiopia: A Preliminary Examination. In: Doris L. Payne et al. (eds.) *Diversity in African languages*, 417-449. Berlin: Language Science Press.

Bergman, Elizabeth M. (2002) *Spoken Sudanese Arabic: Grammar, Dialogues, and Glossary*. Springfield: Dunwoody Press.

BGLDP = Benishangul-Gumuz Language Development Project (2014) *Bertha-English-Amharic-Arabic Dictionary*. Second edition. Assosa/Addis Ababa: Education Bureau, Bureau of Culture and Tourism, SIL Ethiopia.

Borg, Alexander (2006) Cypriot Maronite Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, vol. 1: 536-543. Leiden: Brill.

CLIK = The Catholic Language Institute, Khartoum (2008) *Spoken Arabic of Khartoum*. Khartoum: CLIK.

Cowan, J. M. (ed.) (1979) *A Dictionary of Modern Written Arabic*. Fourth edition. Ithaka: Spoken Language Services.

Davey, Richard (2016) *Coastal Dhofari Arabic: A Sketch Grammar*. Leiden: Brill.

de Jong, Rudolf (2000) *A Grammar of the Bedouin Dialects of the Northern Sinai Littoral: Bridging the Linguistic Gap Between the Eastern and Western Arab World*. Leiden: Brill.

Ferguson, Charles (1970) The Role of Arabic in Ethiopia: A Sociolinguisitc Perspective. In: James E. Alatis (ed.) *Report of the Twenty-First Annual Round Table Meeting on Linguistics and Language Studies*, 355-370. Washington D. C.: Georgetown University School of Languages and Linguisitcs.

Fischer, Wolfdietrich and Otto Jastrow (1980) *Handbuch der arabischen Dialekte*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Gori, Alessandro (2003) Arabic in Ethiopia. In: Siegbert Uhlig et al. (eds.) *Encyclopaedia Aethiopica*, vol. 1: 301-304. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Heath, Jeffrey (1997) Morrocan Arabic Phonology. In: Alan S. Kaye (ed.) *Phonologies of Asia and Africa: Including the Caucasus*, 205-218. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.

Jullien de Pommerole, Patrice (1997) *L'arabe tchadien: émergence d'une langue véhiculaire*. Paris: Karthala.

Kaye, Alan S. (1976) *Chadian and Sudanese Arabic in the Light of Comparative Arabic Dialectology*. The Hague: Mouton.

Kaye, Alan S. (1982) *A Dictionary of Nigerian Arabic*. Malibu: Undena.

Luffin, Xavier (2005) *Un créole arabe: le kinubi de Mombasa, Kenya*. Munich: Lincom.

Luffin, Xavier (2007) Pidgin Arabic: Bongor Arabic. In: Kees Versteegh et al. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, vol. 3: 634-639. Leiden: Brill.

Mahmud, Ushari A. (1979) *Linguistic Change and Variation in the Aspectual System of Juba Arabic*. Ph.D. thesis, Georgetown University.

Manfredi, Stefano (2010) *A Grammatical Description of Kordofanian Baggara Arabic*. Ph.D. thesis, Università degli Studi di Napoli "L'Orientale".

Manfredi, Stefano (2013) Native and Non-native Varieties of Arabic in an Emerging Urban Centre of Western Sudan: Evidence from Kadugli. In: Mena Lafkioui (ed.) *African Arabic: Approaches to Dialectology*, 13-49. Berlin: Mouton de Gruiter.

Manfredi, Stefano (2017) *Árabi Júba: un pidgin-créole du Soudan du Sud*. Leuven: Peeters.

Miller, Catherine (1984) *Étude sociolinguistique du développement de l'arabe au Sud Soudan*. Ph.D. thesis, Université de Paris III.

Miller, Catherine & Al-Amin Abu-Manga (1992) *Language Change and National Integration: Rural Migrants in Khartoum*. Khartoum: Khartoum University Press.

Nakao, Shuichiro (2017) *A Grammar of Juba Arabic*. Ph.D. thesis, Kyoto University.

Neudorf, Susanne (2016) *Phonology of Berta*. Dallas, Texas: SIL International.

Nhial, Abdon Agaw Jok (1975) Ki-Nubi and Juba Arabic: A Comparative Study. In: Sayyid Ḥāmid Ḥurreiz and Herman Bell (eds.) *Directions in Sudanese linguistics and folklore*, 81-93. Khartoum: Institute of African and Asian Studies.

Owens, Jonathan (1977) *Aspects of Nubi Grammar*. Ph.D. thesis, the University of London.

Owens, Jonathan (1993a) *A Grammar of Nigerian Arabic*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Owens, Jonathan (1993b) Nigerian Arabic in Comparative Perspective. *Sprache und Geschichte in Afrika* 14: 85-176.

Prochazka, Theodor, Jr. (1987) The spoken Arabic of Zabīd. *Zeitschrift für Arabische Linguistik* 17: 58-69.

Roset, Caroline (2015) A Phonology of Darfur Arabic. *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 105: 315-342.

Roth, Arlette (1979) *Esquisse grammaticale du parler arabe d'Abbéché*. Paris: Geuthner.

Rouchdy, Aleya (1991) *Nubians and the Nubian Language in Contemporary Egypt: A Case of Cultural and Linguistic Contact*. Leiden: Brill.

Simeone-Senelle, Marie-Claude (2006) Horn of Africa. In Kees Versteegh et al. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, vol. 2: 268-275. Leiden: Brill.

Tamis, Rianne and Janet Persson (eds.) (2013) *Sudanese Arabic-English, English-Sudanese Arabic: A Concise Dictionary*. Khartoum: Catholic Language Institute of Khartoum.

Tosco, Mauro and Jonathan Owens (1993) Turku: A Descriptive and Comparative Study. *Sprache und Geshichte in Afrika* 14: 177-267.

Trimingham, John Spencer (1952) *Islam in Ethiopia*. London: Oxford University Press.

Versteegh, Kees (1984) *Pidginization and Creolization: The Case of Arabic*. Amsterdam: John Benjamins.

Versteegh, Kees (2014) *The Arabic Language*. Second edition. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Wellens, Ineke (2005) *The Nubi Language of Uganda: An Arabic Creole in Africa*. Leiden: Brill.

Wetter, Andreas (2007) Ethiopia. In: Kees Versteegh et al. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, vol. 2: 51-56. Leiden: Brill.